

			3			2		1
	5	4	1	4	3	2	1	④
	第七	I イ	A ウ	ア 1	思 い や り	ア ウ	A イ B ウ C ア	① 計画
		II イ	B ア	イ 2		※2 順不同		② 海外
		III ア	C イ	ウ 1			⑤ 絵馬	③ 当 た っ た
	2	3						
	イ	愛 し て る						

配 点	
1	各2点×5=10点
2~3	各5点×18=90点
<計>100点	

1 ①「画」の筆順に気をつける。まんなかのたてぼうは四画目に書く。②「海」の右下を「母」のように書かない。③「当」は上の部分をカタカナの「ツ」のように書かない。④「新」はうっかり「親」と書いてしまわないようにする。「春」は五画目の右はらいの書き始めの位置に気をつけよう。⑤「絵」のいとへんはつづけ字にならないように書く。

2

- 1 A (A)の前で人と人にはほどよい近さがあり、離れすぎやくつつきすぎはいけないと述べていて、その例が(A)の後に書かれている。
- B (B)の前後で「知らない人」と「親しい人」とが対比されている。
- C (C)の前後で、他人との距離感を身につけている場合のプラス面が述べられている。
- 2 むやみに他人に近よられることを気にする人が感じて「ケンカになってしまう」ものをえらぶ。
- 3 線②の直前にある「これ」は「礼法の心得のひとつに通じてい」るもので、トラブルをさける役割をもつものと考えられる。それを——線②の前から◎の一文に合うようにさがす。
- 4 ア 本文後半の四行に書かれている。
- イ 他人とのトラブルの原因は「距離感」だけではないだろう。
- ウ 本文四行目に「公共の場」の例として「電車や歩道、デパートなど、人が大ぜいいる」ところと述べられていた。

3

- 1 A 「胸をそらす」のは「ほこらしい」「自慢げな」気持ちのときで、「ぼく」は「とうちゃん」が授業中に「愛してる」をいうために電話をかけてきてくれたと思ったのである。「ニボシ」や「房男」のがっかりした様子とあわせて考えよう。
- B 「愛してる」といつてくれると思ったのにちがったのである。期待外れのとときの気持ちをえらぶ。
- C 「とうちゃん」がすなおに「愛してる」といわないので、むすこの「ぼく」はほかの人(ここでは『ニボシ』)に対して引け目を感じたのである。
- 2 (3—2)本文十六行目で「一日に百回も二百回も『愛してる』と叫ぶんだ。」とある。それだけ叫べば声もかすれるだろう。アは線Cの前にある「とうちゃん」との会話から、「とうちゃん」は「ぼく」のことを「愛してる」が、それを口に出していうのがいやだということが読みとれるのでえらべない。ウは本文中からは読みとれない内容である。
- 3 線②をふくむ一文を見ると、「だからとうちゃんも、それいつてくれなきゃ」とあるので、「それ」はここより前で「ぼく」がいつていて、「とうちゃん」にもいつてほしい四字のことばである。
- 4 I 「沈黙」を「木枯らし」にたとえている。ふたつの共通点が答えになるが、アの「暖かく」やウの「楽しく」では「木枯らし」に合わない。
- II IIの直後にある「ちゃんと治っていないのだと思った」と合うのはイしかない。
- III 「とうちゃん」がすなおに「愛してる」といえないことを「ぼく」が警察に電話した結果、「とうちゃん」は逮捕されてしまったのだが、「ぼく」は「とうちゃん」のことを「愛してる」のだからの「憎しみ」はおかしいし、親子なのだからウの「親切」も合わないだろう。くり返されているように「ぼく」は「とうちゃん」を「愛してる」のである。
- 5 逮捕された「とうちゃん」が今いるところである。指示語の答えは前にあるとはかぎらない。